

受験と就職の間

—人材観の変化と来たるべき大学の変貌—

武蔵大学 岩田龍子

はじめに

教育学は、教育についてのできるだけ美しいイメージを創造することを、その使命にしているようだ。それは、目標とする方向性の探求であり、目標は、高くかつ美しいのが良いのかもしれない。

しかし、実際には、さまざまな要因が複雑に作用し合って「現実」を生みだしているわけであるから、事態改善のためには、方向性の探求だけではなく、その実現を妨げている力関係の究明がなされなければならない。それは教育社会学の重要な使命のひとつだろう。

したがって、学歴社会の問題にしても、あるいは教育の現状改善の問題にしても、ただ現状を確かめるだけでなく、何故、どんな力が働いてそうなるのかを、究明することが大切であると思われる。

I. 大学への入口と出口

1) 入口の問題

わずかな偏差値の差に目のいろを変えて、激しい受験競争が繰りひろげられている。受験の成否が人間の評価を左右し、若者の優越感・劣等感を複雑に交差させている。

こういう状況の中で、経営組織の実態について確かめることもなく、学歴の効果を過度に強調するのは論外として、逆に学歴社会は虚像だと叫んでみてもあまり意味がない。

これらの議論に共通するひとつの問題点は、出世動機だけで事態を考えようとしている点にある。

今日、若者たちの多くを受験競争に駆立てている原因としては、出世の問題だけでなく、むしろそれ以上に、受験の成否による人間の評価の問題が重要な意味をもつ。

したがって、受験競争の現状を大きく変えるには、企業側の学歴主義（それはすでになり機能が低下していると思うのだが）の克服だけでなく、人の評価についての世の中の支配的価値観が変わることが重要である。そして報告者は、最近その可能性が高まりつつあると考えている。この問題についてみるために、つぎに出口について考えて見てみよう。

2) 出口の問題

日本の経営組織、少なくとも大学卒の就職先として重要な意味を持つ大企業・中堅企業の場合、これまできわめて長期的な雇用関係のもとでの職場のローテーション、部局を単位とする組織の集团的編成、大量生産体制のもとでの大組織の一系列れぬ活動の要請などを基盤として、特徴的な人材への要求を生みだしていた。それは、グラフに示したように成長力のある全天候型の人物、人に好かれる協調型の人物を、知識・能力を持つ人物よりも重視しようとする傾向である。そして、巨大組織の要請は、これらの人物を能吏型の人物、すなわち、物事の要点を素早く把握し、全体をよくまとめてゆける人物に育て上げていつたのである。

しかし、最近、日本の経営体を取巻く環境が大きく変化し、日本の経営体も変りつつあ

る。ことに日本経済の情報化・サービス化など、いわゆるソフト化の動きの進展によって、日本企業の人材観は大きく変わろうとしている。

II. 企業の人材観の変化

標準品の大量生産が重視された時代には、資本設備と能率的な巨大組織が大きくものをいった。今これらの重要性が相対的に低下し、これに代って、人びとのもつ多様な才能、秀れたセンス、アイディアの重要性が高まり、つつある。

ひとつの革新的なアイディアが急速に業界地図を塗り変えてしまうような時代には、型にはまらない思考、先見性や柔軟な発想・創造性や粘り強い実行力などが、これまで以上に要求されるようになるだろう。

その結果、人材についての世間の評価も大きく変らざるを得ない。受験競争の成否によって、人間を判断してしまうようなこれまでの悪弊は、次第に大きく揺さぶられることになるだろう。

このように教育を取巻く情勢は、事態改善の芽を育てつつあるように思われる。こうしたときに、事態を成行きに任せて、ただ腕をこまぬいているのではなく、あらゆる機会を通じて、人間評価の誤った価値観を、支配的価値観の座から追放することが必要である。

3) これからの大学

今後、大学のイメージや教育内容も、この

様な産業界の動きに応じて、大きく変化し始めるだろう。勿論、大学教育は、産業界のためのものではないとする異論もあろう。しかし、現実には、大学教育は、産業界の動きに無縁ではないし、また、産業界の最近の動きが、人間の評価についてのこれまでの歪んだ傾向を修正させる方向に動いていて、大学教育にとっても、それがあ意味で望ましい方向であるならば、これは現状改革のチャンスととらえることが出来よう。

こうした変化に応じて、今後大学教育に望まれる方向は、大学が偏差値を競う競争から人材を育成するための教育内容を競う真の競争へと突入することである。そのためには、大学は、教育内容の編成について、大幅な自由をもつべきであるし、これまでのような画一的な教育の管理は、思いきって緩和されるべきであ。勿論、大卒の管理とある程度の監督は必要であるが、具体的内容については、大学自身にまかされるのが望ましい。

報告者としては、形式的に整備された「壮麗なカリキュラムの体系」を一応学んだことにして学生たちを卒業させてしまう今日のやり方を変えて、少数のごく基礎的な科目の徹底学習と、幾つかの興味深い問題の自主的追及を核とした、発想力・構想力・創造力の育成に重点を置く教育方式を採用することが望ましいと考えている。

